

アヘンの密輸で 侵される中国



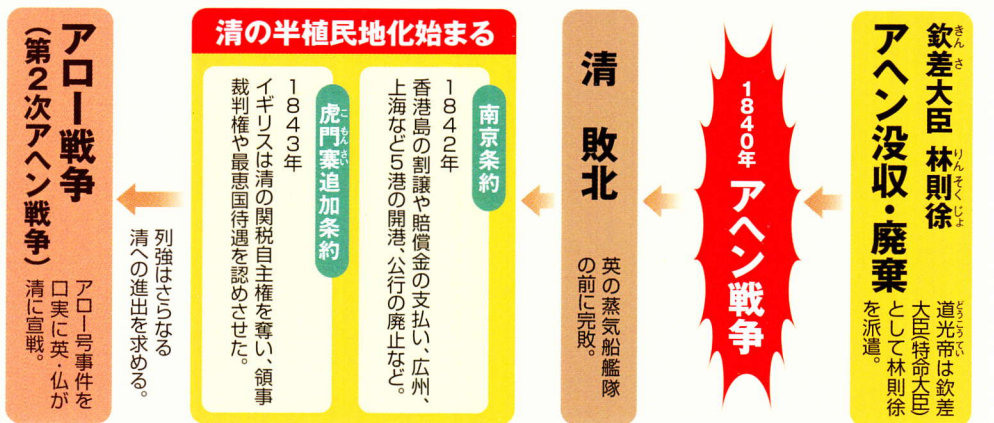
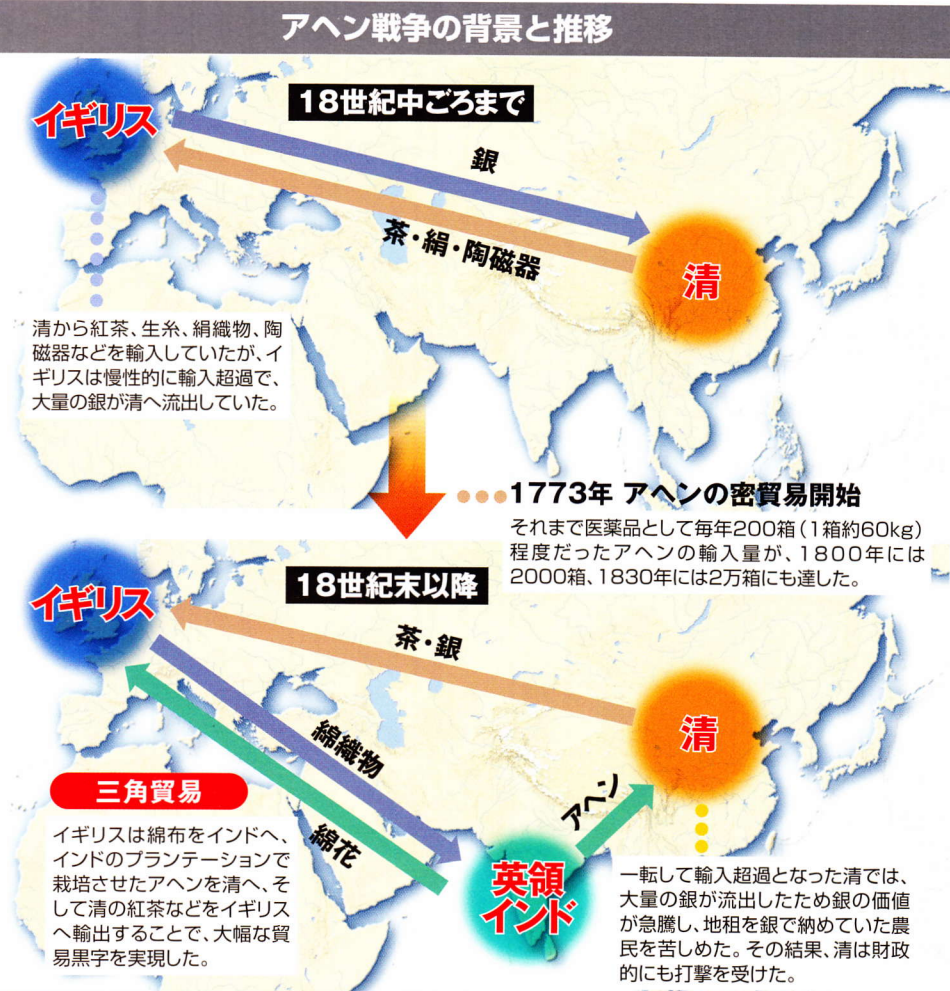
アヘンを没収、廃棄されたことを機に、イギリスは武力で清国に自由貿易を認めさせるべくアヘン戦争をしかけた。

アヘンの密貿易で儲けた イギリスの謀略

乾隆帝の時代に最盛期を迎えた清朝だったが、その後は官僚の腐敗などで弱体化し、18世紀末からは白蓮教徒の乱など、民衆反乱が頻発した。

そのころイギリスは、対清貿易をほぼ独占していたが、紅茶や絹織物などの輸入が増える一方、イギリス産の綿布は売れず、大幅な輸入超過に陥っていた。こうした状況を打開するためイギリスは、清国内でのアヘン吸飲の習慣に目をつけた。

当時インドの大部分を支配下におさめていたイギリスは（P111参照）、インドで栽培させたアヘンを清に密輸する三角貿易を考え出し、大量のアヘンを清に売り込んだ。これによりイギリスは貿易黒字に転じ、清からは銀が流出した。



アヘンが庶民にまで広まったため、事態を憂慮した清朝政府は、アヘンの密輸を取り締まるため、林則徐を広州に派遣。イギリス商社などが所有していたアヘンを没収して廃棄させ、アヘン密輸を厳禁した。これに対し、公行（特許商人）を通じてしか貿易が許されないことに不満をもったイギリスは、武力で自由貿易を認めさせることを決定。1840年、広州に艦隊攻撃をしかけ、アヘン戦争が勃発した。イギリス軍は物資輸送の要衝であった上海の運河を封鎖するなどして戦争に勝利し、42年の南京条約と翌年の虎門寨追加条約により、香港島を獲得したほか、清の関税自主権を奪った。清はさらにアメリカ（望厦条約）、フランス（黄埔条約）とも同様の不平等条約を締結することとなり、列強による中国の半植民地化が開始された。

Key Word

紅茶

中国で製法が確立した紅茶がヨーロッパに紹介されたのは17世紀だが、イギリスでは喫茶の一大ブームを巻き起こし、庶民にまで浸透した。その貿易をめぐるオランダと競争をくり広げ、18世紀からは中国との茶貿易を独占したが、やがて対中国の貿易赤字の元凶となり、アヘン戦争の遠因となった。